



日本列島
病院探訪
全国の特徴ある
病院を取材する
“フォルテ”



“FORTE”

社会医療法人 寿栄会

ありまこうげんホスピタル

Arimakougen Hospital

スーパージョイント救急棟で精神科救急に注力
地域に開かれた精神科病院を目指す

Interview: ドクターズマガジン編集部 Text: 横井かずえ Photograph: 太田未来子

6	5	1
		2
7		4 3

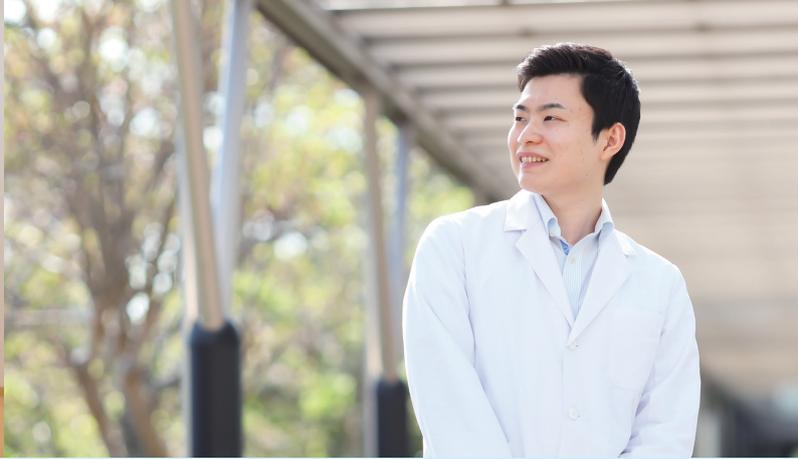
1. 病院外観
2. 新入職研修
3. 院内保育園
4. 保育園外観
5. 精神科専門医・大澤氏
6. 多職種会議風景
7. 工藤慶院長

兵

兵庫県神戸市の最北部に位置する長尾町は、小高い丘に囲まれたのどかな田園地帯だ。古くは弥生時代から人々が居住していたといわれ、町内には重要文化財に指定される多聞寺の仏像など歴史ある文化財が残っている。そのような土地で半世紀以上にわたる、地域の精神科医療を担ってきた病院がある。

社会医療法人寿栄会ありまこうげんホスピタルは、開設当初から「愛の心で医療・福祉に奉仕を」「和の心で協力一致を」「励む心で創意工夫を」を基本理念に掲げて、チーム医療に邁進してきた。和の心を大切にしながらもチャレンジ精神を忘れない、絶えず進化を遂げてきた同院の展望や地域への思い





院長
工藤 慶
Kei Kudo

和

ありまこうげんホスピタルを漢字一文字で表すと

私の座右の銘は「以和為貴(和を以て貴しと為す)」です。この言葉を基本とし、全職員一丸となり日々職務に励んでいます。

1970年に精神科241床、内科79床の有馬高原病院として開設され、今年で53年目を迎えた。2009年に急性期へと舵を切り、現在は精神科救急病棟(スーパー救急病棟)96床、医療療養病棟57床を含む合計417床の病院として24時間365日救急患者を受け入れる。2021年には社会医療法人の認定も取得した。

精神科病院でありながら内科常勤医を配置し、肺炎や糖尿病、高血圧などをはじめとする合併症を持つ患者にも対応できるのが大きな強みだ。また認知症疾患やうつ、統合失調症など高齢者の急性期精神疾患への対応に



内科常勤医が合併症にも対応 治療抵抗性統合失調症に取り組む

について、4半世紀を病院と共に歩んできた工藤慶病院長に伺った。



地域交流・イベント風景

も力を入れている。特に認知症については、認知症に特化した100床規模の老健を持つなど、グループ内でバックアップする体制を整える。

「認知症をどの診療科が診るかはさまざまな意見があると思います。しかし実際には、暴れている患者を神経内科で診ることは困難でしょう。やがては周辺症状が重い患者は精神科で、ある程度落ち着いている人は神経内科でと棲み分けができるのではないのでしょうか」

さらには県内唯一のスーパー救急病棟を持ったクロザリル登録医療機関として、治療抵抗性統合失調症の医療にも力を入れる。「クロザリルは副作用が強い薬なので、血液内科の先生と密に連絡を取りながら処方しています。今のところ重篤な副作用である白血球減少症を出すことも

なく、順調に治療を行うことができている」

精神科領域ではいかに患者が地域に戻り、地域もまた受け入れていくかが大きな課題だ。これに対する解決策のひとつとして、自前のグループホームを介して地域と再びつながりをつくるなど、関連施設を持つ強みを最大限に生かす。

「患者が地域へ戻るにあたっては、まずはグループホームで生活してもらい、『何かあればすぐに私たちがバックアップします』ので安心してください」というメッセージを発信していくことが大切だと考えています」

工藤院長自身は内科医として医師のキャリアをスタートさせている。1995年に当時の山本博一院長から「どうしても内科医が必要」と請われて着任したのが始まりだ。

「当初、2年間だけという約束で当院へ来ました。それが気付けば27年目を迎えています。それだけやりがいがあったということでしょう。もともと医局を選ぶ際に内科か精神科か迷ったほど、精神科に興味がありました。そのため結局、精神保健指定医を取得して今日に至っています」



コミュニケーションロボット
Sota (左)とCommU (右)

産学連携や地域交流を担う「きらきら構想2025」

社会と共有できる価値を創造するCSV (Creating Shared Value) 活動の一環として「きらきら構想2025」にも取り組んでいる。2016年からスタートした同構想は「産学連携活動」「地域交流活動」「医療介護福祉のまちづくり活動」の3本柱で活動を展開する。

産学連携活動では立命館大学や神戸大学、関西学院大学、兵庫医科大学などと連携。関西学院大学とは古民家改修に取り組み、地域コミュニケーションハウス「おくっちょ」を開設した。この他にも地域活性化イベントの実施や地域のニーズ調査、院内ロゴデザインのコングレの開催など活動は多岐にわたる。

地域交流活動では茶話会へ参加して健康相談に応じたり、ウォーキングイベントなどに企

画段階から参加してきた。こうした活動は地域ニーズを吸い上げる土壌となり、交流の中から生まれたニーズに応える形で2022年4月から内科外来をオープンした。

医療介護福祉のまちづくり活動は、2023年にグランドオープンする新A棟の建設プロジェクトと連携して構想を練ってきた。駐車場跡地を地域の人がくつろげる、庭のような公園として整備する他、病棟の機能面では48床×3病棟を完全個室で整備する。こうした取り組みによって地域とのつながりを増やし、患者が地域へ戻りやすい環境づくりにもつなげていく考えだ。

「かつてよりも敷居は低くなったものの、地域から見れば未だに精神科病院に対する心理的なハードルは高いのが事実です。地域との間にある壁を取り払うために、きらきら構想などをはじめとして交流を増やし、地域に開かれた病院づくりを目指したいと考えています」

2019年には精神科の枠を超えてさまざまな学術活動を展開するために「ありまこうげん精神医学研究センター」を設立した。センターでは兵庫医科大学



新A棟。2022年11月竣工、2023年グランドオープン予定

学をはじめ大阪大学、神戸大学、関西学院大学などの連携や共同研究を実施している。

臨床研究助成事業のひとつとして、熊崎博一氏(長崎大学医歯薬学総合研究科)、吉川雄一郎氏(大阪大学基礎工学研究科石黒研究室)らと共に「ロボットを用いた精神科患者支援システムの開発」に関する共同研究などに取り組んでいる。

「自閉症スペクトラムの患者には、人よりもロボット相手の方がコミュニケーションを取ることでできる人もいます。今後はロボットを活用した精神科の新たな治療法なども生み出されるかもしれないと期待しているところです」



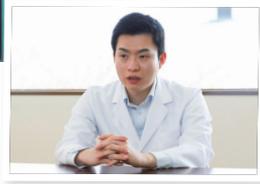
医師から見た

ありまこうげんホスピタルの魅力



症例が豊富にそろい、
資格取得には抜群の環境！

大澤 先生



私は初期研修中に、精神科の救急患者が劇的に改善するのを目の当たりにして精神科に興味を持ちました。精神科は治療方針について、医師の裁量に任せられる部分が多いのが醍醐味です。当院は難治性の統合失調症の治療薬が使えるなど、診療の制限が少ないこともやりがいにつながっています。基幹病院では専門医を取得するための症例が回ってこないという話も聞きますが、ここではそのような心配は全くありません。措置入院も含めて豊富な症例がそろっているので、指定医や専門医を取りたい先生にとっては抜群の環境ではないでしょうか。



子育て中の医師も多く、
家庭と両立しやすいのが魅力

山下 先生

精神保健指定医取得のための指導体制が整っていることが魅力で当院に入職しました。もともと内科医として一般病院に勤務していましたが、出産をきっかけに一度退職し、復職時に精神科に転科しました。精神科を選んだのは、認知症も含めた高齢者医療に興味があったからです。ここでは児童思春期から高齢者まであらゆる年代の患者を診ることができるのが魅力です。女性医師は常勤5人、非常勤2人ですが子育て中の先生が多く、家庭と両立しやすい環境が整っています。また、看護師や作業療法士などさまざまな職種が連携を取りながら患者を診ることができるので、とても診療しやすいのがありますね。



3

医師の働く環境改善に尽力 担当患者数や有給取得率で成果

医師の働き方改革に向けての対応が迫られる中、同院は従来より医師の働く環境づくりに尽

力してきた。ひとりの医師が受け持つ患者数に注意を払い、全ての医師が均等な受け持ち患者数となるように配慮する。また、有給の取得率も約80%に上る。勤務環境の整備や福利厚生を充実させた結果、医師の平均勤続年数は6年3カ月(精神科医・内科医)で、女性医師7人のうち4人が子育て中など、家庭と仕事を両立できる環境も整っている。「有給休暇の取得を奨励した結果、医師も含めた全職員の有給取得率は約80%となりました。もちろんサービス残業なども全

くありません」
指導医が充実していてマンツーマンでの指導体制を整えるなど、精神保健指定医や精神科の専門医の取得をバックアップする体制も万全だ。措置入院も含めた幅広い症例が集まる点も強みのひとつである。「措置入院がない施設では症例を集めるのに苦労すると聞くこともありますが、当院ではそうしたことはありません。1年ほど勤めてもらえばほとんどの症例を経験できると自負しています」

「精神科の魅力について若い医師や医学生に知ってもらいたい」という思いから、初期研修も積極的に受け入れている。「精神科はやる気さえあれば、年齢に関係なく学べる診療科です。当院はチャレンジする先生たちに寛容な病院です。若い先生たちには和を大切にしつつも、どんどん個性を発揮していただきたいと考えています」
少子高齢化がハイスピードで進む中、精神科医療の将来像を描きつつ、先に見据えるのはやはり地域である。

「人口減少社会において、病院はダウンサイジングが必ず求められることになりました。そのときに、何が必要で何が必要ではないのか、見誤らないことが重要だと考えます。今後はハード面の拡充だけではなく、地域へ出向いていくことができます。重要になります。病院に来られずに地域で困難を抱えている人たちのところへこちらから出向いていって、ひとりでも多くの患者を救いたい。そんなふうに地域と共に歩んでいく病院でありたいと願っています」